

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り複製および再配布することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

The University of Tokyo 学術フロンティア講義 2024S 岩川 ありさ



パンデミックを銘記する

学術フロンティア講義 (30年後の世界へ——ポスト2050を希望に変える)

復興の技法3

2024年7月5日(金) 5限 (5:05-6:35PM)

岩川ありさ

研究分野・自己紹介

- 専攻は、現代日本文学、フェミニズム、クィア批評、トラウマ研究。現在は早稲田大学文学学術院准教授です。主な著書に、『物語とトラウマ クィア・フェミニズム批評の可能性』（青土社、2022年）。『群像』2023年7月号から「養生する言葉」を連載中。今日発売の2024年8月号でいったん本にまとめることに。「すばる」2023年8月号に短編小説「僕と自分を呼ぶことが義務づけられた私」を発表しました。8月に現代書館から刊行される『われらはすでに共にある：反トランス差別ブックレット』にエッセイ「雑踏の中でも見つけられる」を書いています。

講義の概要

- 2020年から続くCOVID-19のパンデミックは現在進行形の問題。このパンデミックにおいて、それまでも周縁化され、ケアを受けられなかったり、その生の喪失すら記録されず、嘆かれない人びとの存在をつくりだす、不均衡な世界や社会的な条件が明らかになった。
- パンデミックはすべての人に同じように経験されるのだろうか？
- まず、ジュディス・バトラーの論とバトラーが念頭においている1980年代のエイズ危機のアクティビズムを手がかりにして、差異を持った人びとが共に生きられる「共通世界 (a common world)」について考えたい。その後、「共通世界」はどうすれば想像可能か？ 復興の技法として言語表現と物語を手がかりにして、現在の変容とそこから生まれる未来について、一緒に考えられればと思う。

ジュディス・バトラー(Judith Butler)

・ジュディス・バトラー(Judith Butler)は、フェミニズム、クィア批評を牽引してきた。1980年代のエイズ危機を念頭に置きながら書いた『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱 新装版』(竹村和子訳、青土社、2018年。原著1990年)以来、特定の集団には社会的・経済的な支援のネットワークが欠落し、根本的な不平等が生じており、「あやうさ」が不均等に配分されていると指摘してきた。

・『生のあやうさ——哀悼と暴力の政治学』(本橋哲也訳、以文社、2007年。原著2004年)、『戦争の枠組——生はいつ嘆きうるものであるのか』(清水晶子訳、筑摩書房、2012年。原著2009年)などの著作では、「悲嘆可能性」という言葉を用い、9・11をはじめとして、「わたしたち」と「かれら」を峻別し、「その生の喪失を嘆きうる集団」と「その喪失が悲嘆をもたらさない集団」とに分け、「社会の悲嘆が格差をともなって分配されること」を批判している。その際、バトラーは、「生がはじまり維持されるための条件」として、「ひとつの生が生きられた」という「前未来形」が前提されなければならないという。

ジュディス・バトラー『この世界はどんな世界か？——パンデミックの現象学』

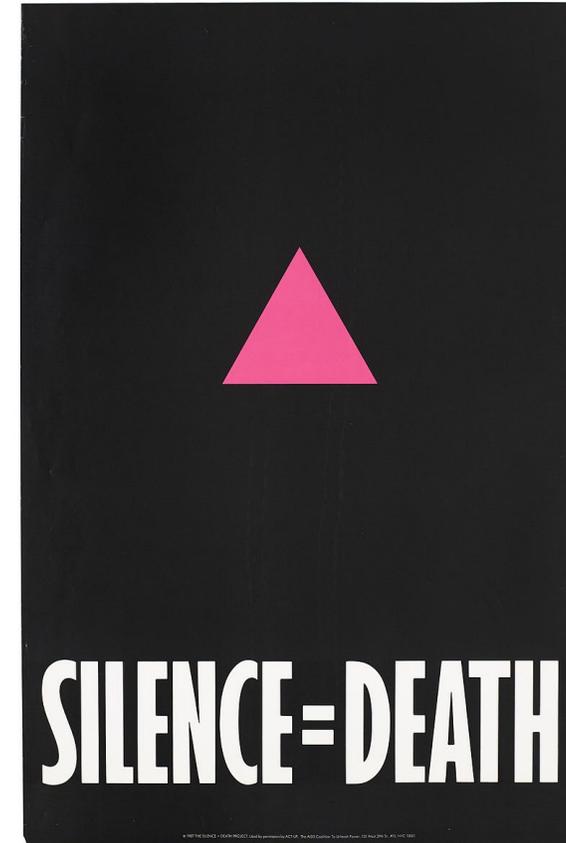
「パンデミックによってわれわれは相互連関の世界に組み入れられる。たがいに影響を及ぼしあうという、この世界に生きるものがもつ能力は、生あるいは死の問題になりうるのだ。これがわれわれの共有する共通世界〔a common world〕であるといっただけでよいのか、私にはよくわからない。なぜなら、われわれは共通世界に住むのを望むであろうが、現在そうなっているかはわからないからである。コモンはいまだ実現されていない。いまは多くの世界が重なり合って存在していると述べるのが、おそらく適切だろう。というのも、世界の主要資源の大部分は平等に分配されていないし、微々たる分け前にしかあずかれない人々もいまだに存在するからである。パンデミックのようなグローバルな現象を銘記するとき、こうした不平等をも同時に銘記せざるをえない。」（ジュディス・バトラー『この世界はどんな世界か？——パンデミックの現象学』（中山徹訳、青土社、2023年、8頁）

1980年代の「エイズ危機」

- 1981年6月5日、アメリカ疾病管理予防センター(CDC)が、『MMWR (Morbidity and Mortality Weekly Report : 疫学週報)』で、ニューモシスティス・カリニが引き起こす肺炎の症例を5例報告。
- 1981年7月3日 New York Times での報道。
- 1982年、MMWRで後天性免疫不全症候群 (acquired immunodeficiency syndrome : AIDS) という名称が使用される。
- 1986年、ヒト免疫不全ウイルス (human immunodeficiency virus ; HIV) という名称に統一。
- アメリカ合衆国政府は適切な対策を取らず。「(ハイ) リスク・グループ」という他者化。HIV/AIDSによって多くの人びとが命を落とした。

エイズアクティビズム：抵抗

- 同性愛嫌悪（ホモフォビア）や無支援。沈黙していれば殺されてしまうという危機感を人々は共有し、連携し、抗議運動やケアを行った。
- 「Silence=Death(沈黙は死)」という言葉やアートでも知られるように、「このまま黙っていては見殺しにされる」という危機の意識が高まった。「ハイリスク・グループ」として名指された人びとは、エイズ危機以前から、経済的、社会的に周縁化され、不均衡な立場に置かれてきた。政府はもとより、薬価をつりあげる製薬会社への抗議など多岐にわたる社会運動を行なった。
- 1982年1月、ラリー・クレマーら、Gay Men's Health crisis設立。「Unless we fight for our lives, we shall die.」→1987年ACT UP(AIDS Coalition to Unleash Power)発足。



A pink triangle against a black backdrop with the words 'Silence=Death' representing an advertisement for The Silence = Death Project used by permission by ACT-UP, public domain, via Wikimedia Commons

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:A_pink_triangle_against_a_black_backdrop_with_the_words_%27Silence%3DDeath%27_representing_an_advertisement_for_The_Silence_%3D_Death_Project_used_by_permission_by_ACT-UP,_The_AIDS_Coalition_To_Unleash_Power._Wellcome_L0052822.jpg

The NAMES Project AIDS quilt

ネームズ・プロジェクト：メモリアルキルト

- 1987年2月、
90×180cmのキルト。
10月「大行進(the Great March)」。
- パンデミックと差別と
無支援の中で、哀悼と
記憶をどう行うか。



Picture of the AIDS quilt, taken from National Institutes of Health ,Wikimedia Commons,
<https://history.nih.gov/pages/viewpage.action?pageId=1016200>

クィア (queer) という言葉

- 「クィア(queer)」という言葉は、「ヘンタイ」や「オカマ」といった意味あいでも英語圏で用いられ、相手を一方的に侮蔑語として使用されてきた。1980年代になると、侮蔑語であるクィアという言葉を手返にとり、自分たちを呼ぶ呼び名として「再占有・再盗用」するようになった。この言葉が用いられるようになった背景には、アメリカ合衆国を中心としたエイズ危機の影響がある。ただし、現在も強い差別語であることは注意が必要である。
- 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子「序章 クィア・スタディーズとは何か」（菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく1 アイデンティティ、コミュニティ、スペース』晃洋書房、2019年）には、「一九七〇年代頃までには差別語として広く認識されるようになっていた」（2頁）と書かれている。また、同書のなかに書かれた、「メインストリーム（社会の主流）」から「逸脱」と名指されるとき、自分も「正常だ」と訴え、「「ノーマル」な位置に身を置くのではなく、むしろ「逸脱」的だとされるあり方（つまり非異性愛的なジェンダーやセクシュアリティ）をメインストリームに対して強烈に可視化することで、「ノーマル」な位置そのものの特権性に異議を申し立てる」（2頁）運動こそ、クィア・アクティヴィズムが行なってきたことであるとの指摘も重要である。

クィア・スタディーズへ

- 1990年には、カリフォルニア大学サンタクルーズ校で、テレサ・デ・ラウレティスによって、「クィア・セオリー」という学術会議が行われ、ジェンダー、階級、人種など、「差異」の問題について議論が行われた。同じ年には、クィア・スタディーズの主要な著作となる、イブ・コゾフスキー・セジウィックの『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀』とジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』が刊行されている。
- 仮にではあるが、クィア・スタディーズは、性、身体、欲望をめぐる、様々な約束事や規範を問いなおす学問領域。特定の生が不当な暴力、死に、不平等にさらされていることそのものを問題にしてきた。

社会的な条件

- 「この生は、将来において、すでに生きられた生となるだろう」というバトラーの言葉が可能になるのは、「保健医療〔引用者注：ルビで「ヘルス・ケア」〕、公教育、住宅、食料の分配と入手可能性の解決策」（ジュディス・バトラー『アセンブリー—行為遂行性・複数性・政治』佐藤嘉幸・清水知子訳、青土社、2018年、38頁）などのインフラストラクチャーや社会的制度、支援のネットワークが整備されていればという条件が必要であり、「生が生として維持されるためには、さまざまな社会的、経済的な条件」（『戦争の枠組—生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳、筑摩書房、2012年、24頁）が十分でなければならない。

前未来形と悲嘆可能性

「わたしたちは、子供が望まれているとき、その生は寿がれて始まる、と考える。しかし、その子の生が悲嘆可能であるという了解、つまり、その子の生は失われれば悲嘆をもたらすものであり、そういう前未来形がその子の生の条件として設定されているのだ、という暗黙の了解がなければ、生を祝うこともありえない。通常の言語では、悲嘆はすでに生きられた生に対して向けられるものであり、すでに終わってしまった生を前提としている。しかし、前未来形に従うならば（それ自体も通常の言語に含まれるわけであるが）、悲嘆可能性は、生がはじまり維持されるための条件となる。今まさに生きられはじめたばかりの生のはじまりの点において、「ひとつの生が生きられた」という前未来形が前提されるのである。言いかえれば、「この生は、将来において、すでに生きられた生となるだろう」というのが、悲嘆可能な生の前提条件であり、それはつまり、この生は生として尊重され／みなされ、その尊重によって維持されるだろう、ということなのだ。」

（『戦争の枠組——生はいつ嘆きうるものであるのか』（清水晶子訳、筑摩書房、2012年、54-55頁）

コロナ禍において・詩の言葉：川口晴美

- 川口晴美（かわぐちはるみ）：福井県小浜市出身の詩人。1985年、第1詩集『水姫』（書肆山田）を刊行。その後、詩集『綺羅のバランス』、『デルタ』、『液晶区』、『ガールフレンド』、『ボーイハント』、『EXIT.』、『lives—川口晴美詩集』、『やわらかい檻』、『半島の地図』、『川口晴美詩集』などを発表。アニメ『TIGER & BUNNY』をモチーフにした詩を含む『Tiger is here.』（思潮社 2015年）で第46回高見順賞受賞、『やがて魔女の森になる』（思潮社 2021年）で第30回萩原朔太郎賞を受賞。編者をつとめた『萌詩アンソロジー 詩の向こうで、僕らはそっと手をつなぐ。』、コロナ禍で詩人たちがリレー形式で日記を綴った『空気の日記』（書肆侃侃房、2022年）などの著書がある。

11月29日（日）東京・神宮前 川口晴美
（『空気の日記』書肆侃侃房、2022年）

殺されて捨てられた女の子の詩を書いたことがある
わたしが〈殺された女の子〉だった可能性をいつも考える
この世のあらゆる場所で殺されていく女の子たち、
4歳で殺されたあの子も、13歳で殺されたあの子も、19歳で殺されたあの子も
わたしだったかもしれないとおもう
わたしのなかには何人もの〈殺された女の子〉がいて
このわたしが生きているのはたまたまなんだって感じている
たまたま殺されずに生きてきて
今こうしているけれど

（前掲『空気の日記』315頁）

先週

64歳で殺されるのかもしれないって思い始めた

帰る家を失って

夜半にバス停の固いベンチでようやく休んで

横たわることをゆるさないベンチだから座ったまま浅く眠っている間に

ペットボトルだか石だかを入れたどこにでもあるビニール袋を

振り上げた知らないひとに

虫を振り払うみたいに殴られて11月16日に死んでしまったのは

わたしなのかもしれない

だって

幡ヶ谷なんてすぐ近くじゃないか

(前掲『空気の日記』 315-316頁)

彼女もわたしも四捨五入すれば60歳ほとんど同じ年じゃないか
今のわたしにはたまたま住むところがあるけれど
何かあれば失うのはたやすい
ひとりになってしまうことだってすぐ想像できる
感染症は春から流行りだした
フリーの仕事なんていつ全部なくなってもおかしくない
どうすることもできないまま夏を過ぎ
お金は使い果たしてもう8円しか残っていない
疲れ切って冷えた体で
助けてくれるかもしれない誰かに連絡する気持ちも萎えて
そこに座っていたのはわたしだったんじゃないか

(前掲『空気の日記』 316頁)

痛い11月の夜の底に殴り倒され
わたしはサイゴノアサに何を見たのだろう
壊れていくのはわたしか世界か
終わりは解放だっただろうか
ねえわたしを殺したのはいったい誰？
ビニール袋を振り上げたあの知らないひと？
そうだけどきっとそうじゃない
10月のうちにわたしがバス停を通りかかって
わたしかもしれないあなたを見かけて気になったとしても
たぶん何もしなかっただろう
できなかった
わたしも
わたしを殺したんだ
わたしは殺された女の子で、殺された女の人で、殺したなにものかの一部だ
寒い12月がくる

(前掲『空気の日記』 316頁)

復興の技法1:インフラを変える

- 「排除ベンチ」の排除に初めて成功…野宿者支援に取り組む市議が平塚駅前ベンチ改修に込めた思いは（「東京新聞」2023年9月4日 06時00分）
- 「排除アート 明確な定義はないが、ホームレスなど特定の人による公共空間の利用を物理的に妨げている造形物を指すことが多い。座面が仕切られた公園やバス停のベンチ、高速道路の高架下や歩道橋の下に置かれたオブジェ風の丸石などが代表例。1990年代以降、設置者の意図にかかわらず、「アート」と呼ばれるようになった。2020年、東京・渋谷でホームレスとみられる60代女性が男に殴られた事件では、女性が夜を過ごしていたバス停のベンチが狭く仕切られていたことが話題となった。」（「排除ベンチ」の排除に初めて成功…野宿者支援に取り組む市議が平塚駅前ベンチ改修に込めた思いは（「東京新聞」2023年9月4日 06時00分 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/274572> 閲覧日2024年7月4日）

復興の技法2：誰が世界を記述するか？

わたしが思うに、みなさんの力で彼女にこのチャンスを与えることが、現在可能になりつつあります。わたしは信じています。もしわたしたちがあと一世紀ほど生きたなら——わたしは個々人の小さな別々の生のことではなく、本当の生、共通の生について語っています。あと一世紀ほど生きて、もし各々が年収五百ポンドと自分ひとりの部屋を持ったなら——。もし自由を習慣とし、考えをそのまま書き表す勇氣を持つことができたなら——。もし共通の居室からしばし逃げ出して、人間をつねに他人との関係においてではなく〈現実〉との関連において眺め、空や木々それじたいをも眺めることができたなら——。もしミルトンの造り出した化けものの背後を、どんなひとであれ視界を遮ってはいけないのですから、その背後を眺めやることができたなら——。もし凭れかかる腕など現実には存在しないということ、ひとりで行かねばならないということ、わたしたちは男女の世界だけでなく〈現実〉世界とも関わりを持っているのだということを実事として受け入れるのなら——。そうすればチャンスは到来し、シェイクスピアの妹であった死せる詩人は、いままで何度も捨ててきた肉体をまとうでしょう。兄ウィリアムがすでにそうしているように、知られざる先輩たちの生から自分の生を引き出して、蘇るでしょう。そうした準備がなかったら、わたしたちの側の努力がなかったら、彼女が蘇ったときに生きて詩が書けると思えるようにしておこうという決意がなかったら、彼女は出現できず、期待は叶いません。でも、彼女のためにわたしたちが仕事をすれば、彼女はきっと来るでしょう。だからこそ貧困の中でだれにも顧みられずに仕事をしたとしても、そこにはやりがいがある——と、わたしは断言するのです。

(ヴァージニア・ウルフ『自分ひとりの部屋』片山亜紀訳、平凡社ライブラリー、2017年、157-158頁。下線引用者)

復興の技法3:物語や言語表現を見出す

- マイノリティの物語、言語表現が増えれば、それが「翼」になる。
- 理不尽なこと、暴力、支配関係などを問い直す言葉が必要。それはすでにある言葉を用いながら。逆手にとって使っても可能。
- そして、そうした表現はこの社会の規範そのものを変えてゆく。
- エンパワメントする物語や言葉の方へ！

参考文献一覧

- ヴァージニア・ウルフ『自分ひとりの部屋』片山亜紀訳、平凡社ライブラリー、2017年。
- 川口晴美「11月29日（日）東京・神宮前 川口晴美」（『空気の日記』書肆侃侃房、2022年）。
- 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子「序章 クィア・スタディーズとは何か」（菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく1 アイデンティティ、コミュニティ、スペース』晃洋書房、2019年）
- ジュディス・バトラー『戦争の枠組——生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳、筑摩書房、2012年。
- ジュディス・バトラー『アセンブリ——行為遂行性・複数性・政治』佐藤嘉幸・清水知子訳、青土社、2018年。
- ジュディス・バトラー『この世界はどんな世界か？——パンデミックの現象学』中山徹訳、青土社、2023年。
- 「排除ベンチ」の排除に初めて成功…野宿者支援に取り組む市議が平塚駅前ベンチ改修に込めた思いは（「東京新聞」2023年9月4日 06時00分 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/274572>
閲覧日2024年7月4日）